

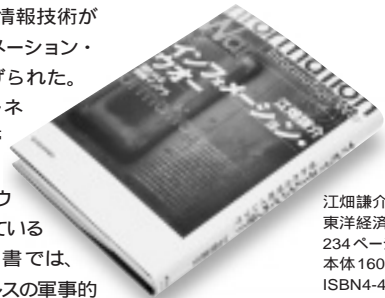
もうすでに起こっている「戦争」

『インフォメーション・ウォー』

情報処理システムは湾岸戦争などの現代の戦争において、指揮系統と密接に関わってきている。相手の情報網を破壊することで、指揮を分断化し戦略的に優位に立つことができるのだ。相手の情報機能を破壊し、混乱させ、無力化させる戦争の概念がインフォメーション・ウォーだ。インフォメーション・ウォーは軍事的なインフラへの攻撃だけでなく、民間のインフラ、金融、交通システムなども攻撃対象となる。著者は湾岸戦争時に

テレビなどで詳細に軍事解説を行っていた江畑謙介氏で、本書ではこの新しい戦争概念を分かりやすく解説している。湾岸戦争から10年も経っていないが、それ以後もボスニア問題、ペルー人質事件といくつかの事件が起こり、そこで日々進歩してきた情報技術が使われ、インフォメーション・ウォーが繰り広げられた。今では、インターネット、PHS、携帯電話網などもインフォメーション・ウォーの戦場になっているようだ。さらに本書では、コンピュータウイルスの軍事的

利用、核爆発を使った強力な電磁パルスによる停電や回路破壊、デマメールによる心理戦、ホームページを使ったプロパガンダと、これまでと違った戦争が繰り広げられる危険性も示唆し、現実味のある危機感を抱かせる。



江畑謙介 著
東洋経済新報社 発行
234 ページ
本体 1600 円 + 税
ISBN4-492-21098-9



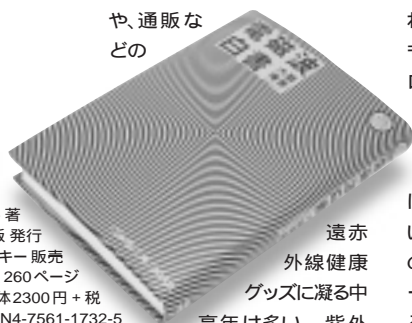
インターネットが凶器になる日

菊地宏明 Hiroaki Kikuchi

電磁波の実体を徹底的に検証

『電磁波白書』

「電磁波は体に悪い」と耳にすることが多いが、そのわりには日焼けサロンで非日常的な量の紫外線を浴びる高校生や、通販などの



遠赤外線健康グッズに凝中高年は多い。紫外線も遠赤外線も電磁波の一種である。結局のところ、われわれは何も分かってないのだ。赤外線や紫外線も「電磁波」と言い換えると、いきなり悪者になってしまうから不思議である。植物が光合成を行うのに、光という適切な電磁波が必要だということも意外と忘れられている。そもそも電磁波とは何なのか、電磁波は

人体に影響を与えるのか、電磁波が社会化している問題、それを取り上げるマスコミの報道姿勢の問題について本書は真正面から挑んでいる。たとえば、携帯電話やPHSで使われるマイクロ波は電子レンジでも使われているが、このマイクロ波は水の分子を振動させて加熱する性質をもつため有害とされやすい。しかし、その放射量は危険とされる量とは桁違いの差があるそうだ。いうなれば、高水圧で硬いものを切断するウォーターカッターを見て水を必要以上に怖がるのと同じだ。実際には、蛇口から出る水量ではトイレトペーパー程度しか切れない。同じように1台の携帯電話が発生させるマイクロ波では、もちろん脳は煮えない。そのほかにもガンなどの不安に脅えている人は読んでみるとよい。電磁波を危険とする説が根拠とする論文を解説しながら、分かっていることとまだ分からないことを教えてくれる。

パソコンと上手に付き合うために

『コンピュータユーザのための健康サバイバルガイド』

本書はタイトルどおりワープロやパソコンの利用者のための健康ガイドブックである。基本的な姿勢の問題、腱鞘炎などの反復運動過多損傷、疲れ目、ストレス、電磁波の健康障害について解説している。姿勢の問題では椅子について解説しているが、その中で特になずけたのが、ニーリングチェアは気をつけたほうがよいとする部分だ。私もかつて、地震があったときにその椅子に座っていて、急いで立ち上りにも足を椅子に引っかける構造のため、あせると椅子から足が抜けずに椅子ごと倒れて死ぬか思った経験がある。背筋は伸びるが、結構疲れ、いざというとき立ちにくいので、あれから二度と座っ

てない。電磁波の章では、一般的に危険性はわかっていないと断っておきながらも、危うきに近寄らずと説いている。白内障についてはコンピュータからのELF（極低周波）と関係ないと前半でいいながら、後半では注意を促す一貫性のなさ。しまいには、オカルト的なグッズを紹介する始末だ。電磁波を漠然と危険視するならば、OA機器を発生源とする化学物質アレルギーに関するページを設けるべきだと思う。やっぱり一番参考になるのは反復運動過多損傷についての章だろう。ここではキーボードやマウスが腕や首に負担をかける可能性を解説している。



Joan Stigliani 著
矢部文訳
オライリー・ジャパン 発行
321 ページ
本体 1600 円 + 税
ISBN4-900900-52-4

大脳博著
ワック出版 発行
アスキー 販売
260 ページ
本体 2300 円 + 税
ISBN4-7561-1732-5

インターネット上の「墓」革命

『サイバーストーン』

サイバーストーンとは、インターネット上に作られた墓石のことをいう。故人の情報を収めたWEBページであり、WWWブラウザで見ることで故人を偲ぶことができるという。サイバーストーンが普及することで、都市部での墓地不足の問題、建築費や維持費といったコストの問題、ひいては墓を守っていく子孫の負担を解決するという。著者は、サイバーストーンを発案して墓革命として推進している。まず、生きた証を後世に残す術として、現代技術を使った墓を考え、身体的記録としてDNAの保存、具体的には髪を保存する方法を、社会的な情報はWEBページに残す

方法をとった。それが、御髪塚とサイバーストーンだ。法事や彼岸などにはインターネットでWWWサーバーのサイバーストーンにアクセスする。高僧の読経がマシンから流れ、葬儀のときばかり活躍する僧侶はお役御免になるという。確かに高温炉で焼骨をした骨からDNAを探すより、髪の毛のほうがいいだろう。しかし、墓の意味とは後世へのデータバンクなのだろうか。宗教関係者である著者がけっこうクールに見える。個人的には宗教色のない宗教家に死後の個人データを委ねる気にはならないし、地震や火事でのデータ消滅を考えると、個人データはデータ管理者に預けるほうがいいような気がする。そうはいっても、次世代の墓を模索する著者の姿勢は評価したい。



松島如戒 著
毎日コミュニケーションズ発行
191ページ
本体1500円+税
ISBN4-89563-065-X

西垣通 編著訳
NTT出版 発行
298ページ
本体3300円+税
ISBN4-87188-497-X



現在のパソコンが生まれるまで

『思想としてのパソコン』

パソコンは1980年代に大ブレイクしたコンピュータである。90年代になるまで、パソコンはコンピュータの中で傍流とされてきた。それまでの汎用大型機やスーパーコンピュータにくらべると、低速で貧弱な能力しか持たないと見られてきた。現在、パソコンは世界のコンピュータの大多数を占めるほどに普及し、世の中の主流となっている。マイクロプロセッサの普及から二十数年で、ここまで進化を遂げたパソコンを生み出して成長させた、いくつものコンピュータ設計思想を本書は紹介している。メメックス、チューリングマシン、ザナドゥは、コンピュータサイエンスを学ぶ者なら

一度は聞いたことがあるだろう。これらはコンピュータの発展の上で重要な概念で、これらに影響されて数々のハードやソフトが生まれていった。あらためて、これらの論文に触れることができるのが本書だ。

マルチメディアの概念を生み出したメメックスのヴァネヴァー・ブッシュ、計算機械チューリングマシンを考えたA・M・チューリング、マウスの生みの親ダグラス・C・エンゲルバード、ハイパーテキストというコンセプトを生み出したドゥシシステムを構築するテッド・ネルソンら7人と西垣氏の序章。そこにはコンピュータの設計思想の素晴らしさや、さらにはそれを実現した人々の偉大さを感じられる。パソコンは一日にしてならず、ということだ。

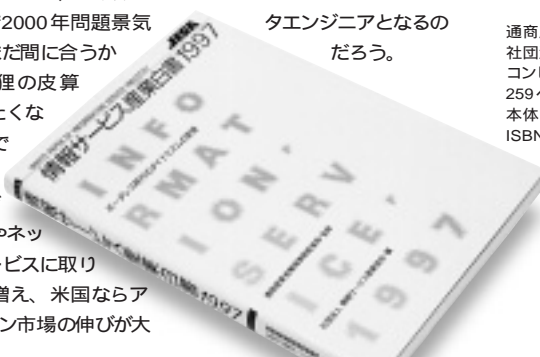
コンピュータ業界の産業白書

『情報サービス産業白書 1997』

コンピュータ業界の産業白書だ。近年のこの業界の概要がまとめられている。たとえば、94年の半ばにコンピュータの国内出荷額でパソコンが汎用コンピュータを上回ったデータがある。また導入しているコンピュータの機種にしても、2位のオフィスコンピュータから20ポイント以上の差をつけてパソコンがトップの78.2%となっている。90年代を代表するコンピュータは今や名実ともにパソコンとなった。さて、今話題の西暦2000年問題についてみると、対応状況は96年

時点において、民間で71.6%、官公庁で86.8%が検討中か未検討という。さらに官公庁の64.4%が、まだ予算を割り当てていない。そのため98年から99年にかけて作業のピーク時期を迎えると予想される。これを読んでいると、コボルとアセンブラで2000年問題景気に乗るならまた間に合うかと、捕らぬ狸の皮算用をしてみたくなる。ソフトでは、日本ならパッケージソフト開発やネットワークサービスに取り組む企業が増え、米国ならアプリケーション市場の伸びが大

きく、ついでシステムソフトウェアが伸びている。ヨーロッパで統合パッケージソフトが急成長しているのも見逃せない。なるほど、TCP/IP、Javaパッチリで、SAPやオラクルを操り、Accessは朝飯前なら、国際的に通用するコンピュータエンジニアとなるの



通商産業省機械情報産業局 監修
社団法人情報サービス産業協会 編
コンピュータ・エージ社 発行
259ページ
本体5400円+税
ISBN4-87566-161-4



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp